

オオバシマムラサキの栽培方法の確立に関する試験

— 播種及び挿し木による増殖方法について —

新 地 富 一

(教育学部実習地)

緒 言

オオバシマムラサキは果実が黒っぽい紫色に熟し、密集するムラサキシキブで小笠原諸島特産の種である。果実の特徴から園芸的利用に向くものと考えられるが、その増殖および栽培方法などは詳しく調査されていない。本試験では教育学部構内のオオバシマムラサキを材料として増殖方法の試験を行った。

材料と方法

本試験は2001年に教育学部実習地圃場で行った。播種方法の比較のため、剥皮処理区、無処理区を設け種子各50個を用いて、ペーパーポット各1区画に種子1個を播種した。用土は川砂、鹿沼土、畑土、混合土の4種類とした。播種60、90、150日目に各区の発芽率、草丈を調査した。挿し木はまず穂木の部位による比較をするため休眠枝を上部、中部、下部にわけた。また、時期の違いによる挿し木への影響をみるため、休眠挿し(3月)と緑枝挿し(8月、9月、11月)を行った。双方の試験とも用土は川砂、鹿沼土、バーミキュライトとし、各10本を育苗箱に挿した。活着率、根量は挿し木後30日目に調査した。

結果と考察

種子の発芽率は剥皮処理区が25~45%、無処理区が5~15%であり、無処理区が低かった。用土の違いによる発芽率は鹿沼土が剥皮処理区で45%、無処理区で15%であり、他の用土より優れていた(第1図)。

種子の処理と播種用土の違いが草丈に及ぼす影響では、川砂、鹿沼土に比べ混合土、畑土の生長が高かった。これは混合土、畑土には肥料分が含まれていたためと考えられる。なお一番生長のよかった畑土は4種類の用土の中で最も肥沃な土であったと思われる(第2図)。

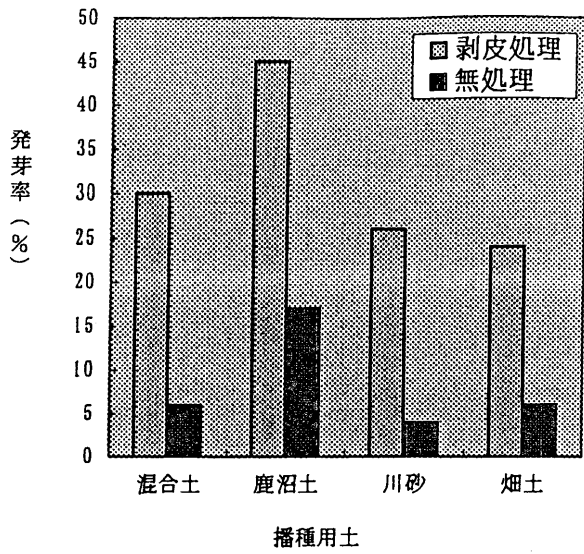
挿し木の時期と用土の違いによる活着率については、夏挿しのバーミキュライト、鹿沼土、川砂で100%と最も高く、秋挿しで80~90%と高い値を示したが、休眠挿し、冬挿しでは低くなった。特にバーミキュライトが休眠挿しで0%、冬挿しで20%と低かった(第3図)。

休眠挿しにおける穂木の部位と用土の違いによる活着率については、下部の挿し木が60~80%と高く、上部が0~40%と低かった。特にバーミキュライトは上部で0%と低かった(第4図)。

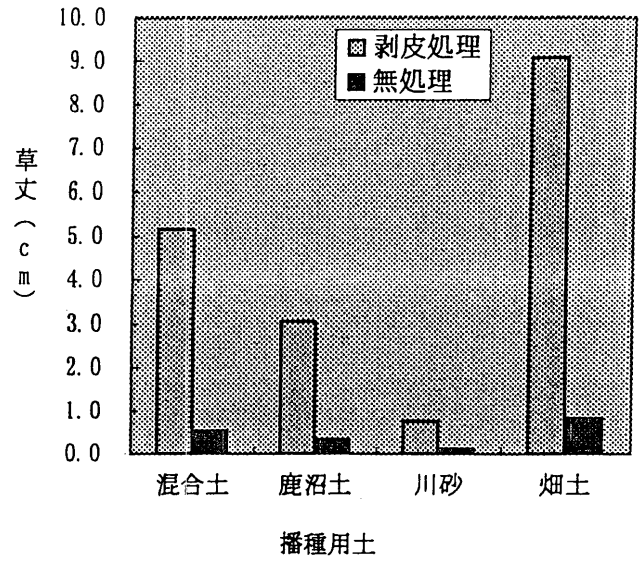
挿し木の時期と用土の違いによる根量については0~5までの6段階で評価を行った。秋挿しは3.3~4.2と高い値を示し、休眠挿しは0~1.9と低い値を示した。この事から挿し木30日後の初期生育においては暖かい時期は根の分布も多くなり、寒くなると少なくなることが認められた(第1表)。

以上の結果から、剥皮処理した種子を播種すると発芽率が上昇することが認められた。発芽率は、鹿沼土が高く、伸長生育は畑土がよいことが明らかとなった。挿し木では夏挿しの活着率が高く、用土においては、鹿沼土が良いことが認められた。

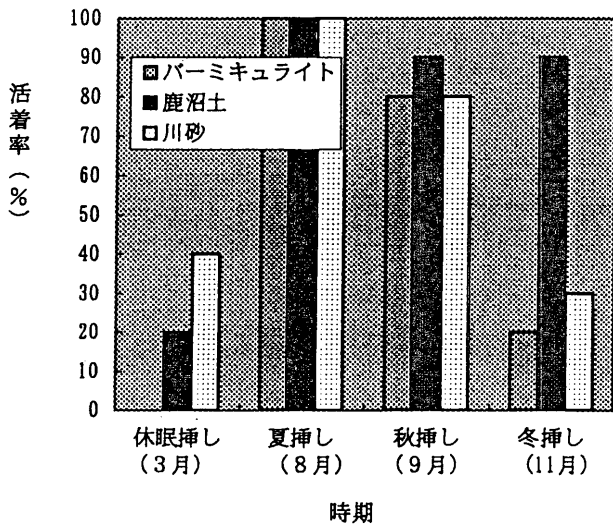
今後は、オオバシマムラサキが、園芸用植物として使用できるように栽培試験、調査を進めていきたい。



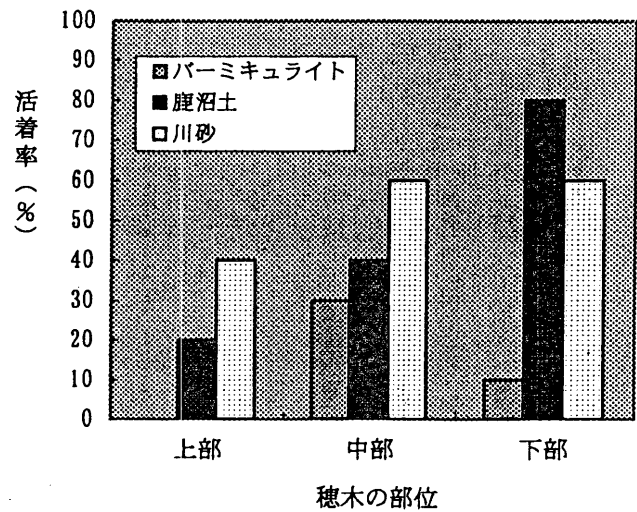
第1図 種子の処理と播種用土の違いが発芽率に及ぼす影響 (播種150日後)



第2図 種子の処理と播種用土の違いが草丈に及ぼす影響 (播種150日後)



第3図 挿し木の時期と用土の違いが活着率に及ぼす影響 (挿し木30日後)



第4図 休眠挿しにおいて穂木の部位と用土の違いが活着率に及ぼす影響 (挿し木30日後)

第1表 挿し木の時期と用土の違いが根量に及ぼす影響 (挿し木30日後)

	休眠挿し(3月)	夏挿し(8月)	秋挿し(9月)	冬挿し(10月)
パーミキュライト	0.0	3.1	3.3	0.2
鹿沼土	1.9	3.4	4.2	2.6
川砂	1.5	4.2	3.6	0.4

注) 根量は0 (無) から5 (多) までの6段階で評価した。